

中間態の研究 (II)

——古ノルド語に対する予備的研究——

大 森 裕 實

A Study on Middle Voice, Part II: a preliminary research into Old Norse

Yujitsu OHMORI

緒 言

前稿「中間態の研究 (I)」(2015) で言及したように、日本の英語学 (English Philology) の祖として知られる市河三喜 (1886-1970) は¹⁾、英語の科学的な Philological Research を深化させ、現代の英語をよりよく理解するためには、古英語 (Old English) 及び中英語 (Middle English) の基礎的知識が不可欠であるとの信条に基づき、『古代中世英語初歩』(1935) を著わした²⁾。それに先行して、同氏は『ラテン・ギリシア語初歩』(1930) を公刊したが、英語学徒が修得すべき古典語知識への導入となる該書の副題に「英學生の爲め」と記載されていることに、著述の意図を読み取ることができる。残念ながら、古ノルド語 (Old Norse) /古アイスランド語 (Old Icelandic) に関する入門書は著わしてはいないが、語源との関連から、同氏が ON を意識して英語学研究を進めていたことは、*Chaucer's Canterbury Tales: General Prologue* (1934) [後年、松浪有 (1924-95) により同名で改訂新版 (1987)] に附した註記や語彙集、及び東京帝大英文科での講読で採り上げた Robert L. Stevenson (1850-94) の著作 *Treasure Island* (1883) に附した註釈からも窺える³⁾。

本稿では、上述のような伝統的 (あるいは古典的) 英語学研究の系譜に即して、英語学徒であれば避けては通れない古ノルド語 (ON) に関する基礎知識を記述すると同時に、現在の英語では文法範疇化されない「中間態 (middle voice)」について、特にそれと関連の深い ON に特徴的な「再帰態 (reflexive)」及び「中間受動態 (medio-passive)」について考察し、

英語学研究の一助とする。

1 古ノルド語研究の基礎知識

1-1 古ノルド語の輪郭

比較言語学の教えるところによれば、古ノルド語が属すると考えられるゲルマン語派は、インド-イラン語派、ギリシア語派、イタリック語派（ロマンス諸語）、アルバニア語派、スラブ語派、ケルト語派、バルト語派、ヒッタイト語、トカラ語を直系に含むインド・ヨーロッパ語族(Indo-European Language Family)において、重要な位置を占める。

さらに詳しく、このゲルマン語派を観察すると、次の4つの語群に分類することができる（高橋 1982: 3-4）。

① 北欧ゲルマン語——古ノルド語（Old Norse）に起源をもつ、（西地域）ノルウェー語、アイスランド語、フェロー語；（東地域）スウェーデン語、グトランド語、デンマーク語。

② 北海ゲルマン語——アングロサクソン語（英語の母体）、フリジア語、サクソン語（後の低地ドイツ語）。

③ 中欧ゲルマン語——低部フランク語（オランダ語の母体）、中部フランク語、高地ドイツ語（高部フランク語、バイエルン語、アレマン語、ランゴバルド語）。

④ 南欧ゲルマン語——ゴート語、ルギ語、ブルグンド語、ゲピード語、ヴァンダル語（これら諸語の間に差異はほとんどない）。

このように、言語学的には、古ノルド語は北欧ゲルマン語群（Nordic）に分類されるが、もう少し詳しくノルド語（Norse/ Nordic/ Nordisch）の歴史的区分について記述すると次のようになる（下宮・金子 2006: 13）。

- i) ゲルマン祖語（紀元前数世紀-AD200年頃）
- ii) ノルド祖語（AD200-700年頃）
- iii) 古ノルド語（AD700-1250年頃）
- iv) 古アイスランド語（AD1250-1550年頃）
- v) 近代アイスランド語（AD1550-現在）

『新英語学辞典』（1982: 798-9）によれば、上掲 ii ノルド祖語（原始ノルド語）は、ユトランド半島周辺及びスカンジナビア半島で出土したルー

ン文字 (Runes) 碑文の言語で、ゲルマン祖語に近い形を留めている。また、上掲 iii 古ノルド語期には、ルーン文字の簡略化が行なわれ、ラテン文字の文献が見いだされる。さらに、上掲 iv 古アイスランド語は、アイスランドに移住したノルウェー人の言葉に起源をもつと考えられ、孤島という地理的条件から当該言語の孤立化が進み、近代アイスランド語には今日でも移住当時の ON の特徴が保持されている。

地理的条件という観点からは、前稿で採り上げたゴート語 (一般に東ゲルマン語) と本稿で採り上げたノルド語 (一般に北ゲルマン語) の関係は、意外にも、それらが西ゲルマン語 (英語、オランダ語、ドイツ語など) に示す関係よりも親近性が高いことも指摘しておかねばならないが、それはゴート人の原住地 (スカンジナビア) と関連すると考えられる。

1-2 古ノルド語／古アイスランド語の文献資料 (現存テキスト)

ここでは、『新英語学辞典』(1982: 799) 及び『古アイスランド語入門』(2006: 17-9) の記述を基に簡略にまとめ直して、参考に附す。

a) 最古の資料——ルーン碑文 (Gallehus の horn [デンマーク金製の盃: 4 世紀]; Øvre Stabu の槍先 [東ノルウェー: 3 世紀])。

b) Elder Edda [旧エッダ] —— Poetic Edda と呼ばれる。AD 1220-30 年頃にアイスランドで編集。AD900-1050 年頃の北歐神話詩、箴言詩、英雄伝説詩の集大成。最古の写本として Codex Regius [王の写本] (c. 1270) がある⁴⁾。Neckel-Kuhn 刊本では、Vǫluspá [巫女の預言] (天地創造から宇宙崩壊まで) や Hávamál [ハーヴァーマール] (古ゲルマン民族の精神・風俗・習慣に関する箴言) など 37 詩篇を収録。

c) Younger Edda [新エッダ] —— Prose Edda と呼ばれる。通称 Snorri Edda ともいう。Snorri Sturluson (1179-1241) の作で、三部構成 (北歐神話の要約、詩語の解釈、詩形・韻律の解説と見本)。

d) Skaldic Poems [スカルド詩] ——スカルド (skald) は北フランスの troubadour 同様に宮廷詩人のことであり、巧みな技法ケニング (kenning) を駆使した宮廷詩⁵⁾。紀元後 9 世紀以来 200 名ものスカルドが存在したようだが、最大の詩人は Egill Skallagrímsson (c.910-90)。

e) Saga [サガ: 王の功績や民衆の生活を描いた「語りもの (散文) 文学」] — Egils Saga (c.1220-40) [詩人エギルの生涯]; Snorri's Heimskringla (c.1225-30) [ノルウェー王朝史]; Njáls Saga (c.1280);

Volsungasaga [英雄伝説「ヴォルスング一族のサガ」(ドイツの『ニューベルンゲンの歌』と同じ題材)]; Grettis Saga (c.1320); 等。

※その他、Íslendignabók (アイスランド史: 12世紀前半)、Grágrás (法律書: 12世紀中葉)、Landnámabók (植民記録: 12世紀中葉) などもある。

上掲の文献資料はおよそ三群にジャンル分けすることができる——(b)及び(c)が「エツダ群」、(d)が「スカルド群」、(e)が「サガ群」、就中、Elder Eddaは古ノルド語研究にとって最大の第一次資料であるといえる。

1-3 古ノルド語・アイスランド語の基礎的文法書及び辞典10選

- (1) Byock, J. L. (2013) *Viking Language 1: Learn Old Norse, Runes, and Icelandic Sagas*. Pacific Palisades, CA: Jules William Press.
- (2) Einarsson, S. (1945) *Icelandic: Grammar, Texts, Glossary*. Johns Hopkins University Press.
- (3) Gordon, E. V. (1956²) *An Introduction to Old Norse*, rev. by A. R. Taylor. Oxford Clarendon Press.
- (4) Jónsson, S. (1927) *A Primer of Modern Icelandic*. Oxford Clarendon Press.
- (5) Sweet, H. (1886/1895²) *An Icelandic Primer: Grammar, Notes, and Glossary*. Oxford Clarendon Press.
- (6) Valfells, S. & Cathey, J. E. (1981) *Old Icelandic: An Introductory Course*. Oxford University Press.
- (7) 森田貞雄 (1984) 『アイスランド語文法』 大学書林.
- (8) 下宮忠雄・金子貞雄 (2006) 『古アイスランド語入門』 大学書林.
- (9) Feist, S. (1923) *Etymologisches Wörterbuch der gotischen Sprache*. Max Niemeyer. [The 3rd edition was published by E. J. Brill in 1939.]
[※ゴート語語源辞典だが、巻末のアイスランド語情報が有益]
- (10) Zoëga, G. T. (1910) *A Concise Dictionary of Old Icelandic*. Oxford Clarendon Press. [最新 reprint は University of Toronto Press, 2004.]

1-4 古ノルド語/古アイスランド語のテキスト注解(入門)

次節で言及する印欧語の中間態“heita”(to be called)や再帰代名詞“sér”

を含む Njáls Saga の一部を上掲(6)のテキストから抜粋して、古ノルド語読解の例を示す。

Chapter 1: Hallgerðr á barns aldri

(Hallgerth never possesses a child)

Þat var einhverju sinni, at Høskuldr hafði vinaboð, ok þar var Hrutr,
 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
bróðir hans, ok sat it næsta honum. Høskuldr átti sér dóttur,
 11 12 13 14 15 16 17 18
er Hallgerðr hét. Hon lék sér á gólfinu við aðrar meyjar.
 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28

1. 'it' *þat* pron. n. nom. sg.
2. 'was' *vera* 3 sg. past. indicative
3. 'a certain/one time' *einnhverr* adj. n. dat. sg.; *sinn* noun. n. dat. sg.
4. 'that' *at* conj./ ここでは when の意
5. 'Hoskuld' *Høskuld-* personal name. m.
6. 'had' *hafa* 3 sg. past. indicative
7. 'feast for friends' *vinaboð* noun. n.
8. 'and' *ok* conj.
9. 'there' *þar* adv.
10. 'Hrut' *Hrut-* personal name. m.
11. 'brother' *bróðir* noun. m. nom. sg.
12. 'his' *hans* pron. m. gen. sg.
13. 'sat' *sitja* 3 sg. past. indicative
14. '(the) next to' prep.-phrase [+ dat.]/ *næsta* は *nær* 'near, close' の最上級
15. 'him' *honum* pron. m. dat. sg.
16. 'had/ had for wife' *eiga* 3 sg. past. indicative
17. 'himself' *sér* **reflexive pron.** m/f. dat.
18. 'daughter' *dóttir* noun. f. acc. sg.
19. 'who' *er* relative pron./ conj.
20. 'Hallgerth' *Hallgerðj-* personal name. f
21. 'was called' *heita* 3 sg. past. indicative/ **middle voice**
22. 'she' *hon* pron. f. nom. sg.

23. ‘played herself’ *leika sér* 3 sg. past. indicative/ **reflexive**
24. ‘on’ *á* prep. [+ dat.]
25. ‘the floor’ *gólf*- noun. n. dat. sg.; *inu* def.-art. n. dat. sg./ 定冠詞が接辞的に附加される Gordon (1956²: §112) 参照
26. ‘with’ *við* prep. [+acc.]/ ON の *við* は with の意味も against の意味ももつ (cf. 現代英語の We will be fighting with the company. はその残存形)
27. ‘other’ *annarr* adj. f. acc. pl./ Gordon (1956²: §101) 参照
28. ‘girls/ maidens’ *mær*- noun. f. nom. pl./ Gordon (1956²: §84) 参照

“It was one time when Hoskuld had a feast for friends, and there was his brother, Hrut, and (he) sat next to him. Hoskuld had a daughter who was called Hallgerth. She played (= enjoyed herself) on the floor with other girls.” (試訳)

1-5 古ノルド語の英語への影響

デン法地域 (Danelaw) の定めにより、OE に多くの ON 語彙が借入語として採り容れられたことは英語史の教えるところである。内容語 (content word) としては、名詞— man / wife / father / folk / mother / house / thing / life / sorrow / winter / summer 等、動詞— will / can / cast / die (OE. *steorfan* > *starve*)/ meet / come / bring / hear / raise / see / think / smile / stand / sit / take (OE. *niman* と一時期 *rivalry* となり、それを駆逐) 等、形容詞— aloft / full / wise / better / best / over 等が挙げられる。また、特筆すべきは、機能語 (function word) の借入であり、*fro*, *both*, *though*, *till* に加えて、三人称複数代名詞 *they-their-them* にまで至る。音韻的にも、語頭子音の連結 [gi-] や [sk-] (OE では [(sh)-]) は典型的な ON 語彙である—— *gild* / *give* / *get* / *skill* / *skirt* / *sky* 等。

一般的に、言語接触に附随する影響は、通常は語彙レベルに留まることが多いが、同族のゲルマン語派にあったことに起因して、ON の影響が OE-ME の統語法 (syntax) や屈折形態 (morphology) にまで及ぶことは、稀有な例として注目し得る。Jespersen (1948⁹: §80) に依拠すれば、① ME における “will” と “shall” の未来助動詞としての用法は ON に類似していること、② 仮定法過去完了における tense marker “have” の省略が

デンマーク語に酷似していること、③属格 (genitive) が必ず名詞の前に置かれる現象が ON に類似していること (OE ではドイツ語同様に、名詞の後に置かれることも多い) 等を指摘することができる。また、Baugh & Cable (2002⁵: §79) に依拠すれば、北部ノーサンブリア方言に見受けられる現在分詞の屈折語尾 “-and” (eg. *bindand*) は ON の影響を受けたものと考えられ、中部方言及び南部方言の “-end /-ind” に対応する——現在では “-ing” に取って代わられている。

2 古ノルド語にみる中間態⁶⁾

2-1 本来的中間態 (middle voice) の残存

古ノルド語／古アイスランド語において、印欧祖語にまで遡ると思われる中間態 (正確には中間受動態) を体現する動詞語形は OE や Gothic 同様に “*heita*” (*heiti* [1. Pres.]) の 1 語のみが認められるが、それ以外は迂言形式 (*vera+p.p.*) で表現するのが一般的である。新約聖書「マタイによる福音書」第 5 章 “イエスと律法” の件を例示する。

第 5 章第 19 節 ...; skaltu *heita* eptir sverðinu Gullinhjalta.

“the man shall be named after”

参考 Gothic Bible: ... *sah mikils háitada in Piudangardjai himine.*

「その者は天国にて大いなる者と称されん」

この直系にあたる英語動詞 *hight* “to be called” に関連して、後期近代英語 (L.Mod.E) を代表するジョンソン博士の編んだ『英語辞典』(初版 1755／第 4 版 1773) では、スペンサー及びドライデンの作品から引用する形で、この動詞は「受動の意味をもって過去時制で使われる」と解説している。

OED 第 2 版で *hight* の項を調べると、archaic (古語) 表示の後、「ゲルマン祖語に起源をもち、語形態としては、OE. *hāt-an* (過去形 *heht*) / OFris. *hêta* / OS. *hêtan* / OHG. *heizzan* / ON. *heita* / Goth. *háitan* (過去形 *haiháit*) 等があり、古ゲルマン語の中間受動態 (medio-passive) を表わす動詞形で、英語ではこれが唯一、中間受動態の痕跡を留めるものである」との解説を確認することができる。

ここで注目した *hight* という動詞は、その起源を古く ON や Gothic にまで遡ることができるため、ゲルマン語が本来備えていた中間態 (middle

voice) の residue ではないかと想定する手懸りを提供しており、古く印欧祖語に存在したと推定される中間態へと考察を進める道標的役割を果たしているといえる。

- OE. hātte (hātan)[sg.] / hātton [pl.]
 ON. heite / heita
 Goth. háitan háitada [3 sg. 'is called'] / haihát [pl.]

2-2 中間受動態としての再帰態 (reflexive)

ゴート語に存在する中間受動態 (medio-passive)、ラテン語やケルト語に存在する能相欠如動詞 (deponent verb)、古ノルド語／古アイスランド語の再帰動詞 (reflexive verb) 等は、いずれも印欧語に元来存在したと推定される中間態にその起源を遡ることができると考えられる。要するに、印欧語においては、能動態と中間態の二態が存在し、いわゆる受動態は後代の発達であると考えられるので、これらの関係を図示すれば、次のようになる。



上掲の図式における中間態と再帰態の関係性をよく表わすものに、ギリシア語文法における terminology がある。ギリシア語文法では、中間態のことを再帰態と呼んでいるが、それは、①動作が直接的に動作主に再帰す

る場合、②動作が間接的に動作主に再帰する場合、③動作が動作主の負担において生じる場合に中間態が使用されるという機能的観点からであろう。加えて、ギリシア語では、アオリストと未来形を除けば、受動態の屈折形態と区別されることなく中間態が使用される特徴がある。特に、上掲①動作主への直接的再帰機能は、他動詞の自動詞の機能への転換現象につながる興味深い言語事実を提示している。

eg. -μαι	λουωμαι	(I wash myself	>	I bathe)
	πειθομαι	(I persuade myself	>	I obey)
	παυωμαι	(I stop myself	>	I cease)

確かに、中間態と受動態の動詞屈折形態の融合 (syncretism)⁷⁾は認められるが、ギリシア語には再帰代名詞 (εμαντοῦ) の他に、強意代名詞 (αὐτος) 及び相互代名詞 (ἀλλήλων) が存在することを考慮すると、他の言語に比べて、全体的に機能融合の程度は大きくはないといってよい。それとは対照的に、ゲルマン語の場合、代名詞の数もいくつかに収斂して、機能融合の程度が大きくなるため、再帰態の表わす意味が複雑になるのである。

本稿が注目する古ノルド語の場合、中間態から派生したと考えられる動詞語形態を伴う再帰態は、おそらく再帰代名詞や人称代名詞を再帰的に使用した「再帰相表現」に取って代わられたと判断される。以下に人称代名詞と再帰代名詞の変化表を掲げて、参考に附す。

〈人称代名詞〉

sing. 1	(nom) ek	(acc) mik	(gen) mín	(dat) mér
sing. 2	þú	þik	þin	þér
sing. 3	m.	hann	hans	honum
	n.	þat	þess	því(þí)
	f.	hon	hennar	henni

〈再帰代名詞〉

sing./plur. 3		sik[g]	sín	sér
---------------	--	--------	-----	-----

これらの観察を通して、ゲルマン語では印欧祖語が本来備えていた中間

態から派生したと考えられる再帰態については、その痕跡を留めず、すでに迂言形式による受動態構造と、再帰代名詞を組み込んだ再帰表現構造へと分化が進んだという推論が生じるのは首肯できる。しかし、古ノルド語に特異な中間受動態（再帰態）構造が再構築されているとなると、その推論は必ずしも妥当とはいえない。

古ノルド語／古アイスランド語の場合、(再帰)代名詞の与格 (dative) あるいは対格 (accusative) を動詞の接辞として附加することにより、新たに中間受動態（再帰態）なる動詞屈折形態を融合生成するに至った⁸⁾。その原因は、与格あるいは対格支配の動詞の目的語の位置にあった（再帰）代名詞——これは後続する不定詞の主語の機能を果たすものだが、その母音の強勢が弱化して、脱落するに及んで、直前の動詞と音融合したものと推測される。結果、新たに生成された（動詞屈折を伴う）特異形中間受動態 (V-sk) と、(純粋な) 再帰代名詞表現 (sik) とが語形態により区別されることになった。次の例では、Type (1) が中間受動態構造、Type (2) が再帰代名詞表現構造を表わしている。事例中、MM は Middle Marker を表わし、RM は Reflexive Marker を表わす。

Type (1)

<i>Þú</i>	<i>sagði-sk</i>	<i>vera</i>	<i>godr</i>	<i>æknir.</i>
you	said-MM	to be	good	doctor
NOM			NOM	NOM
“You said that you were a good doctor”				

Type (2)

<i>Svasi</i>	<i>kvað</i>	<i>sik</i>	<i>vera</i>	<i>þann</i>	<i>Finn-inn.</i>
Svasi	said	RM	to be	that	Finn-DEF
NOM		ACC		ACC	ACC
“Svasi said he was that Finn”					

(Kemmer 1993: 186改)

また、現代アイスランド語においても、多少の子音の相違は見られるものの、古アイスランド語と同様に、中間受動態構造と再帰代名詞表現構造が併存している様態を看取することができる。

<i>klæða</i>	<u>sik</u>	>	<i>klæðask</i>	>	<i>klæðast</i>	Middle:	“dress”
<i>klæða</i>	<u>sig</u>					Reflexive:	“dress oneself”

2-3 中間受動態（再帰態）の機能的意味分類

古ノルド語／古アイスランド語の動詞屈折による中間受動態（＝再帰態動詞）の意味機能について、Gordon (1956²: §170) を参考に、出典の確認できるものを中心に、文法機能の面から分類し、検討を加える。

(1) Purely Reflexive

eg. *verjask* “defend oneself”

Eyvindr varðisk vel ok drengiliga. (Hrafnkels Saga)

(2) Equivalent of Intransitive Verb

eg. *sýnask* “seem (*sýna* ‘show’)”

oc gierðu burg aina sum sýnis (Legends of Gotland)

(3) Reciprocally

eg. *berjask* “fight with each other”

verðask “slay each other”

Bræðr munu berjask ok at bonum verðask (Snorri Edda)

“brothers will fight with each other, and to slay each other”

(=become each other’s slayers)

(4) Passive

eg. *sattask* “agree to”

at sættask við yðr “to be reconciled with you”

eyddisk “be made desolate”

er landit eyddisk af “when the land was depopulated”

byggjask “be settled”

Ísland byðisk fyrst or Nórvegi (Ari Þorgilsson)

(5) Active = Indirect Reflexive

eg. *eignask* “possess (for oneself)”

(6) Accusative with Infinitive Construction

※不定詞節の主語と主文節の主語が一致している場合

- eg. *Skinir lézk ganga mundu*
“Skinir said he would go” (Snorri Edda)
Allir kváðusk flygja vilja
“All said they were willing to follow” (Grœnlendigna Þáttir)

上掲(6)の特殊用法について詳述すると、主節の動詞に *segja* / *kveða* / *láta* / *telja* / *kalla* / *hyggja* 等が使われる場合、主節と従属節の主語が同一の時、従属節の動詞が不定詞となり、従属節の主語が消失して、主節動詞の中間態(再帰態)の語尾で代替される。この場合、再帰態動詞は本来の機能をもたず、語尾の部分に従属節の主語となるべき代名詞が潜んでいる様相を呈する。

- eg. *en Án sagðist freista skyldu*
“and Án said that she should attempt” (森田1981: 163)

さて、これらの分類から、ONの再帰態動詞は再帰代名詞表現構造から再生成されたにもかかわらず、その意味機能が多岐にわたり、印欧語がもっていた本来的な中間態の意味機能に類似していることが看取できる(2-2節の図参照)。特に、(1)再帰、(4)受動、(2)自動といった再帰態動詞の意味は、それが能動態のもつ他動性と対極にあることを示唆している。印欧語の中間態が内包する意味機能の加重負担が原因となり、いくつかの文法形式への分化が進んだことを第2-2節の図は示しているが、その過程において、再帰態が担った役割を看過することはできない。ONの再帰態動詞は、その本質的再帰相を中核としながらも、意味機能において、印欧語の本来的中間態の範囲を射程に収めている実態は、いったい何を示しているのだろうか。結局、それは印欧語の中間態から直截的に再帰化・受動化・自動化が進行したと考えるよりは、その過程段階において、再帰動詞による再帰態が存在した——それがONでは中間受動態として範疇化されている——と推論する有力な証拠を示している。

2-4 再帰態動詞の心的意味分類

古ノルド語の再帰態動詞の相(Aktionsart)についての本邦先駆的研究はおそらく前島(1959: 830-40)であろうが、その心的意味分類に即して、Gordon(1956²) 載録のテキストで確認できるものについて検証してみる⁹⁾

——①知覚・認識を表わす動詞 (*glezk* ‘been touched’ fr. *Grettis Saga*) ; ②意図・試み・必然を表わす動詞 (*fýstisk utan* ‘took to journeying abroad’ fr. *Grœnlendigna Þáttir*; *radask* ‘try for myself’ fr. *Hrólfs Saga Kraka*) ; ③精神的充足(満足)を表わす動詞 (*þau leika sér á gólfinu* ‘they enjoyed themselves on the floor’ fr. *Völsunga Saga*) ; ④感情(喜怒哀楽)を表わす動詞 (Gordon テキストでは載録未確認) ; ⑤発話・質問を表わす動詞 (*bað men forvitnask* ‘bade men to inquire’ fr. *Hrólfs Saga Kraka*; *hann talðisk undan* ‘he refused’ fr. *Brennu-Njáls Saga*)。

これらの実例を観察すると、再帰態(動詞)が自己を含めた行動を表現する印欧語の本来的中间態のもつ特徴を具現化したものであることが分かる。また、この趣の相は、ラテン語の場合、異態動詞(能相欠如動詞 [deponent verb]) が内包する心的意味領域と類似している—— eg. *hortor* ‘exhort, encourage’/ *vereor* ‘fear, be afraid’/ *loquor* ‘speak’/ *mentior* ‘lie’/ *fruor* ‘enjoy’/ *nitor* ‘endeavor’/ *queror* ‘complain’ 等。

2-5 再帰態動詞の機能分化

Zoëga (1910)、Einarsson (1945)、Gordon (1927/1956²)、Maejima (1959) を参考にして、再帰態動詞の実例を網羅的に観察すると¹⁰、古ノルド語の再帰態動詞がもつ広義の「再帰」が表わす多様な機能が「自動詞的機能」と「静的受動態的機能」の2つの中心的機能に収斂していくことが分かるが、紙幅の関係上、この点については回を改めて論じたい。

結 言

古ノルド語は北ゲルマン語派の枢要な位置を占め、他地域のゲルマン諸語には見受けられない特異な再帰態動詞が、目的語として後続する再帰代名詞を接辞化することにより再生成されている言語事実をそこに確認することができる。従って、この特異な再帰態動詞のもつ文法機能の精査を通して、印欧語に本来備わっていた中間態がゲルマン語に分派した段階において、直截的に受身・再帰・自動といった機能に細分化したのではなく、その移行過程の中間段階に、中間受動態(再帰態)なる文法範疇が存在したと考える蓋然性の証左として、古ノルド語の再帰態動詞を位置づけることができた。

印欧語が元来備えていたと考えられる中間態がどのような経緯を辿ってゲルマン語に継承され、それが古英語・中英語を経て、現代英語の文法範疇の一部に至っているのかを考究する際に、道標の役割を果たしてくれる重要な言語の一つが古ノルド語であり、それに対する洞察が科学的英語学研究にとって不可欠であることは言を俟たない。

註

- 1) 市河三喜 (1886-1970) については、『英語学人名辞典』(1995) の他、寺澤芳雄「市河三喜と日本の英学」『明治・大正の学者たち』(1978) に詳しい。
- 2) 『古代中世英語初歩』は、その後、松浪有 (1924-95) により、『古英語・中英語初歩』(1986) に改訂された。
- 3) 研究社版『宝島 (Treasure Island)』(1921/1935 [改訂]) は市河門下の岩崎民平 (1892-1971) の講義ノートを基に編まれた。
- 4) Codex Regius は1662年にデンマーク王に献呈され、コペンハーゲン王立図書館に長く所蔵されていたが、1972年にアイスランドに返却された。
- 5) ケニング (修辭的代称) については、松浪有「Kenning 考」『英語史研究』(1964: Chap. 8) 及び「古英詩の用語」『詩 I』(1977: 62-74) に詳しい。一般に、OE 詩に見受けられる隠喩的な婉曲表現を指し、複合語の形式を採ることが多い。北ゲルマン語の詩語として (特に、Skaldic Poetry において) 発達を遂げたものと考えられる——海 (sea) を表わす OE *hvaeles edel* / ON *hváls búð* ‘whale’s dwelling’ は典型例。
- 6) 本稿第2節の記述には、部分的に大森 (1996) と重複する箇所があることをあらかじめ断っておく。
- 7) 機能融合 (syncretism) とは、文法上異なった機能を有する複数の語形が音変化等の原因によって融合し、1つの語形で前時代の異なった語形の機能を果たす言語史上の現象をいう——「ラテン語の与格は印欧祖語の処格と助格の機能を併合したものである」や「古英語の与格は古い時代の助格の機能を兼ね備えている」と表現している時には、このことを意味している。現代英語における、直説法 (叙実法) と接続法 (叙想法) の関係も同様である。語形態が簡素化される反面、1つの語形にいくつかの文法機能を担わせることになるため、そこから意味の曖昧性が生じる原因にもなる。
- 8) 新たに中間受動態 (再帰態) を生成するに際して、接辞となる (再帰) 代名詞については見解が分かれる。与格起源説は Adolf Noreen が支持し、対格起源説は M. Nygård が支持する。森田 (1981: 113-4) によれば、

Noreen がスウェーデン語話者であり、Nygård がノルウェー語話者であることが、すなわち、母語の感性が起源判断に作用したのではないかとの見方もある。

9) 詳しくは、大森 (1996: 16-17) 参照。

10) 詳しくは、大森 (1996: 18-19) 参照。

附記

誤植訂正——前稿「中間態の研究 (I)」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第47号 (2015) 第168頁第2行下線部 gaidnja sik nmanagei は gaidnja sik managei の誤り。謹んで訂正する。

参考文献

- 市河三喜 (1935) 『古代中世英語初歩』 研究社, (改訂新版は松浪有との共著の形で『古英語・中英語初歩』 研究社, 1986)
- 大塚高信・中島文雄 [編] (1982) 『新英語学辞典』 研究社.
- 大森裕實 (1996) 「ゲルマン語における中間再帰態構造—ゴート語と古アイスランド語の *sik を中心に—」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第28号.
- 大森裕實 (1999) 「中間再帰態構造と自動詞・他動詞の転換現象」『近代英語研究』(近代英語協会) 第15号.
- 大森裕實 (2015) 「中間態の研究 (I)」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第47号.
- 下宮忠雄・金子貞雄 (2006) 『古アイスランド語入門』 大学書林.
- 菅原邦城 [訳] (1988) 『北欧の言語 [新版]』 東海大学出版会. (orig. Elias Wessén, *Die nordischen Sprachen*, 1968.)
- 高橋輝和 (1982) 『ゴート語入門』 クロノス.
- 前島儀一郎 (1946) 「英語に於ける Medio-Passive の発達」『市河三喜博士還暦祝賀論文集』 21-34. 研究社.
- _____ (1959) “Old Norse Reflexive Verbs” 『名古屋大学文学部十周年記念論集』 829-850. 名古屋大学.
- 松浪 有 (1964) 『英語史研究』 松柏社.
- 松浪 有・御興員三 (1977) 『詩 I』 (講座英米文学史 1) 大修館書店.
- 森田貞雄 (1981) 『アイスランド語文法』 大学書林.
- Baugh, A. and T. Cable (2002⁵) *A History of the English Language*. Routledge.

- Bekker-Nielsen, H. (1967) *Old Norse-Icelandic Studies: A Selected Bibliography*. University of Toronto Press.
- Byock, J. L. (2013) *Viking Language 1: Learn Old Norse, Runes, and Icelandic Sagas*. Jules William Press.
- _____. (2015) *Viking Language 2: The Old Norse Reader*. Jules William Press.
- Einarsson, S. (1945) *Icelandic: Grammar, Texts, Glossary*. Johns Hopkins University Press.
- Gordon, E. V. (1927) *An Introduction to Old Norse*. The 2nd edition rev., A. R. Taylor, 1956. Oxford Clarendon Press.
- Jespersen, O. (1905/1948⁹) *Growth and Structure of the English Language*. Basil Blackwell.
- Kemmer, S. (1993) *The Middle Voice*. John Benjamins.
- Valfells, S. and J. E. Cathey (1981) *Old Icelandic: An Introductory Course*. Oxford University Press.
- Zoëga, G. T. (1910) *A Concise Dictionary of Old Icelandic*.